

浄土

monthly JODO

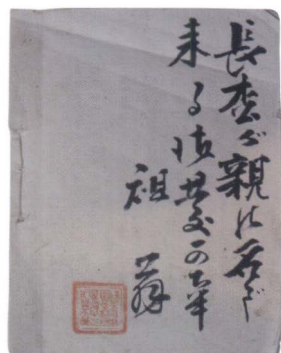
12

2018
December

貧乏董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



左右 105ミリ、天地 141ミリ。本文 276 ページ。三つ目綴じの和装本であるが、袋とじではなく、ひと折 16 ページの折丁。下は最終ページ。書き込みと落款があるが、私には読めない。

ところ、タイトルに五千題とあるが、収められているのは三千数百題である。五千題とはすこし大きな書名である。

明治二六（一八九三）年発行の『俳諧發句五千題』。これを買ったのは東京・江東区の富岡八幡宮の骨董市だ。あの恐ろしい殺人事件（二〇一七年十二月）の半年ほど前である。値段は五百円だったか。

発行者は大阪の岡本仙助、著作者は近藤延之助と奥付にある。タイトルが示すように、連句の発句を季節ごと、季節別に五千句収録した本である。撰者は其柏庵悟友。のどには三か所穴が開けられ、こよりで綴じてあるが、これはあとから修復したものだろう。表紙は欠けている。

まず「歳旦之部」から始まる。季節は「一日」。

一日や正しく見ゆる一家内 山成
一日ハ生まれたまゝのこゝろ哉 米僊
一日や暮れは淋し夜店處 梅笑
一日も半日は寝て暮しけり 米豊

の四句が収められている。作者について、江戸文学に詳しい方ならご存知なのかもしれないが、私にはわ

からない。ただ、そのあと「日始」の「海山も静かなりけり日のはしめ」の北枝という名は憶えがある。たしか芭蕉の門弟ではなかったろうか。北枝は江戸中期の俳人であるから、この本はそのころの発句を収めたものだろう。じつはそのあたりについて、本にはなんの説明もないのである。

発行元の岡本仙助は、明治時代の出版社である。国会図書館のデータベースを見るといくつもの本が収蔵されていることがわかる。数冊タイトルを上げてみる。「日本軍隊教範」「万国史直訳 近世史」「日清戦争記」「絵本近世太平記」「英文典講義・文法詳解」など内容は多岐にわたっており、翻訳書も多い。

ネットで検索してみると、ある古書店にこの本が出ていた。表紙も付いている。カラーの美しい表紙である。私が入手した本は、傷みが激しかったのか、元の所有者が修復したさいに、表紙は破棄したのだろう。その所有者が書き込んだと思われる句がところどころにある。達筆でほとんど判読できない。最終ページの書き込みの十七文字のうち、私にわかるのは半分以上の八文字である。情けない話だ。

浄土

2018/12月号 目次

法然上人とお弟子たち.....	石丸晶子	2
連載 響流十方	袖山榮輝	10
連載 江戸の川を歩く②⑥.....	森 清鑑	14
連載小説 渡辺海旭⑨③	前田和男	22
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	31
編集後記		32



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝鬼海弘雄

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

法然上人鑽仰会 主催●平成三十年

石丸晶子氏講演概録

法然上人と

お弟子たち(一)

平成三十年六月二十二日 於増上寺慈雲閣

法然上人の生きた時代

現在、世界からは日本という国は仏教国であると言われています。もちろん細かく見れば、クリスチャンの方もいらつしやいますし、神道の方等々いらつしやと思います。しかし、諸外国から見れば、日本は仏教国であると言われています。

もちろん、仏教徒は圧倒的に多いです。そのような仏教の世界にありまして、今日、いろいろな宗派があります。皆様、それぞれ、浄土宗に所属しておられる方、そうでない方、いろいろいらつしやと思います。

今日、それらの宗派のほとんどは、鎌倉新仏教と言われる仏教です。仏教が日本に伝来いたしましたのは欽明天皇の時代、飛鳥時代になります。都が奈良に移る以前の時代に、仏教は日本に入りました。

そのときに入った仏教は南都六宗といわれるものです。平安時代は四百年続いた時代です。京都から見ると奈良は南の都で、南都と呼ばれます。初期の頃、仏教が伝わったのは、奈良の都、あるいは吉野・飛鳥です。このとき、仏教のいろいろな宗派が入って、私たちがよく知っている東大寺、興福寺あるいは唐招提寺、薬師寺、元興寺、いろいろな寺が作られました。南都六宗とは俱舎・成実・律・法相・三輪・華嚴の六つの宗派があります。奈良時代はごちやごちやで、いろいろな殺人事件等々がありました。聖武天皇、光明皇后という天武天皇系のお孫さんとかひ孫とか玄孫とか、天武天皇の系統の人が奈良時代の天皇でした。

ところが、奈良時代の末になりますと、当時、天武天皇系は一夫多妻ですから、子供たちがいっぱいいるわけです。奥さんが複数いますから。内親王とか皇子とか、それから皇子のお子さんとか、そういう方々がいっぱいいたわけです。奈良時代の終わりになると、その人たちが皆、天武天皇系統の人たちは、言ってみれば、殺し合い、殴り合いで、天皇家を継承する人が天武天皇系統ではいなくなってしまうした。

そして、いなくなったときに、では天皇をどこから連れてこようかということになって、天武天皇系の人を中心であったときには、隅っこに逼塞していた天武天皇のお兄さんの天智天皇系の皇子しかいなくなっていました。元をたどればこの二人は兄弟で、天武天皇系が一人もいなくなつたので藤原氏に担がれて、天智天皇系統のお子さんが六十何歳まで、その頃にしてはおじいちゃんしかいなくなつて、藤原氏はその人を担いで、奈良時代最後の光仁天皇ということになりました。

それで、奈良時代の天皇家での殺し合い、殴り合いの時代の変革期に興つたのが、伝教大師最澄の天台宗、比叡山と、弘法大師空海の高野山の真言宗で、奈良時代南都六宗に対して平安仏教と言います。それが天台宗、真言宗であります。

平安時代の初めにそれらが成立して、ずっと四百年ぐらい、圧倒的に天台宗、真言宗、特に比叡山の天台宗が天皇家の庇護を受けて栄えていたわけです。

そうしたところから起つたのが、末法時代です。日本では一〇五七年から仏教思想では「末法」に入ると言われました。これはお釈迦様がいらした頃は、人々に教えがあり、人々が仏様に帰依することができた時代で、それが「正法」の時代です。それが千年続いて、そのあとが悟れる人がいなくなってしまう「像法」の時代が千年。そして一〇五七年からはいよいよ

よ世も終わりで、どうしようもこうしようもない、人々は信仰心なんか捨てて、互いに好き勝手なことをして暗黒世界になっていくのが「末法」の時代です。

一〇五七年というのは、『源氏物語』が完成したのは、大体一〇〇〇年です。その頃に紫式部が『源氏物語』を完成したと言われています。それから五十七年たったあとから、末法の世の中に入ることになったのです。

そう言われているところに、本当にどうしようもない時代になったと、人々の心の中に深く深く染み通った事件が相次いで起こりました。

それは一一六〇年以後、一二二〇年代までの六十年間ぐらい、殺し合い殴り合いの最悪の時代が、京都を中心に続きました。

一一三三年法然上人がお生まれになりました。そして十三歳のとき、十五歳とも言われていますが、岡山県の生まれ故郷から比叡山に入ります。その頃の比叡山は今の東京大学です。もつとも、今は東大といっても、そういうレッテルがすっかり落ちて、誰もびつくりしないですが、この時代は東大がピカピカしていた時に相当する比叡山でした。いつの時代でもお坊さん階級は、人々のリーダーであり、知識人であります。この頃、寺子屋もない時代で、庶民はよほどの豪族でもない限り、読み書きはできません。だから、まず読み書きができて、知識階級、指導者階級になろうと思ったら、まず学問を勉強しようと思ったら、比叡山に行つて、天台の教えを学ぶということが唯一絶対だったわけです。

ちようどこういう時代に、法然上人は比叡山に登つて、そこで四十数年間、修行をし、万巻に及ぶ経文を何度も何度も読み返しました。

その比叡山にいらした頃、この比叡山の西の麓は京都です。京都で何が起こったか。源

氏と平家の騒乱であり、平家の滅亡であり、大飢饉であり、大地震であり、マリアの大流行であり、次から次にいろいろなことが起こる時代を法然上人は丸々お生きになりました。

その頃もずっと、平安時代の初めに開かれた比叡山の天台宗、それから高野山の真言宗という二大宗派が、伝統的に学者階級、貴族階級、偉いお坊さんとして信仰されていました。

しかし、この末法の世の中に入ったとされた当時、十二世紀、一一〇〇年代の前後から社会不安が相次ぎ、貧窮困苦の者たちを輩出する社会的条件が揃っていました。

どういうことが起こったかと言うと、例えば、全国的規模で見ると、源平盛衰の果てに平家一門が壇ノ浦で滅亡するという大事件が起こりました。

現在、私たちはマスコミ、テレビなどが発達して、世界のニュースが、トランプさんのニュース、オーストラリアのニュース、ロシアのニュースもその日のうちにテレビ、新聞でわかります。

当時は、そういう伝達の手段が全くありません。飛脚が、人間が、てくてく歩いて、手紙を一月、二月かかって、どこかに届けるということしかなかったわけです。

ですから、当時の都である京都といっても、そこに住む人たちの見聞、あるいは生きる場所というのは、本当にその周辺に限られる狭いところだったということを、念頭に置かなければならないと思います。

そういうところに源氏と平家、武士の世の中が起こり、保元の乱、平治の乱でたくさんのお公家さんや武士たちが殺され、そして平家が繁栄し、やがて僅か二十年の後に壇ノ浦で一家一族、滅亡します。

平家が都から退くということだけでも、平安京という、今から考えると、ずっと狭い空間

の中で、それまで支配的に威張っていた、富み栄えていた平家一門が、たくさんの郎党たち、一門所属の武士たちを率いて、一万、二万という軍勢が、自分たちの平家の屋敷に火を放って、神戸のほうに向かって、馬を駆け、船に乗って逃げていきます。大騒ぎで、それこそ狭い京都の中で大変なことが起こりました。

そして、平家が落ちたあとにやってきたのが、まず源義仲の軍勢です。そして、平家はやがて壇ノ浦で沈んだあと、平家狩りが都を初め、全国各地で徹底的に行われます。

非常に恐怖の世の中です。『平家物語』を見ますと、平家の公達きんたちを捕まえて源氏のほうに差し出すと、いろいろなご褒美が貰えるので、ご近所の綺麗な、ハンサムな男の子たちを、まだ小さな、五つ、六つ、十歳前後の子供たちを、地域の人がこれは平家の公達ですと差し出したのです。

その子の両親は庶民ですから、「いやいや、これはうちの子供です」と言うと、差し出した地域の人たちが、「これは乳母がかばって、自分の子供だと言ってるけれども、本当は公達の息子です」とか「若君です」とか言って、そういう罪のない庶民の人たちがどんどん平家の残党狩りで殺されてゆきました。

そこで、また処刑された、こっちでも処刑されたという大騒ぎが、京都を中心に日本全国で繰り広げられた時代でした。

そのあと源範頼、義経が殺され、奥州藤原氏が滅亡します。

頼朝が死にます。京都でも源氏方の人が平家の残党とくっついていたり離れたりして、乱が起こり、それから地方では農民を圧迫する荘園の取締役たちがいました。

都の中では、平家の残党狩り、そして一世一代の権力を誇った後白河法皇が亡くなりま

す。

そして、平家は都落ちするときに、自分たちの住まい六波羅のあたり一帯に火を放って、屋敷を火事で燃やして、何万人の軍勢を率いて、まず神戸のほうに赴いて、そこから船に乗って落ちていくから、平家が落ちていったあとの都は、本当にがらくただけになりました。

たくさんの孤児たち、寡婦たち、それから手足を切られて半殺しみたいになったお侍さんたちとか、庶民たち、そこで放火が横行し、盗賊が横行し、そうしているところに天然痘が起こり、マラリアが起こり、そして、神社仏閣同士の騒擾、喧嘩、それが京都の狭い市中で何百人という双方の人たちが大喧嘩して、多数の死者、けが人が出ます。

それから、『源氏物語』の頃までは延暦寺を中心に一応大きな波乱はなくて、収まっていた仏教の世界でも、延暦寺や興福寺の大衆だいしゅといいますが、僧兵といいますが、正式の僧侶ではなくて、その下で手足となって動く人たちが数千人、延暦寺等々にいて、この人たちが何か不満があると、神輿を担いで比叡山から山を下りて、京都の都に侵入して、大変な騒ぎでした。

この当時のお公家さんの日記を見ると、「そらまた延暦寺の僧兵が日吉大社の神輿を担いで、後白河法皇に強訴した」とか、「たくさんのけが人、死者が出た」とか、いろいろなことが書かれて、この法然上人が生きた時代は、まさに人々が末法の世の中だということを痛感した時代であります。

この平家の都落ち、壇ノ浦での一家一族の滅亡もまさに哀れ極まりないことですが、その後に来た残党狩りも無残極まるもので、日本中すごく大荒れに荒れていた時代です。

京都だけではなく、源平の合戦では、京都を都落ちした平家の後を追って、義経率いる源

氏の大軍が岡山県、山口県、そして壇ノ浦で勝負を決する大合戦を開くわけです。

そうすると、その源氏や平家が通過する西国の国々、つまり大阪、兵庫、岡山、広島、山口、北九州の諸国、四国の諸国は、源氏や平家の人々に踏み荒らされた人々、国々で、たくさん死傷者が続出し、兵隊たちが、その行く国々で、狩り出されて行きます。

そしてまた、平家が滅んだあとは、源氏のお侍さんたちは、自分の故里である東国に引き上げていったけれども、しばらくの間、多くの源氏の軍勢は京都に留まり、やがて栃木県とか武蔵の国とか静岡とか千葉とか、自分たちの生まれ故郷に源氏の侍たちは帰ってきます。

帰っていく道々で、今の東海道とかそういうところで、自分たちが見聞きした恐ろしい生き地獄の話を撒き散らしていきます。

だから、この末法の恐ろしい、人々が殺し合い、殴り合い、無残に死んでいくという身を震わすような恐ろしい出来事は、壇ノ浦だけではない、京都だけではなく、日本全国にわたって人々を震え上がらせたわけです。そういう時代に法然上人は浄土宗という教えを開かれたわけです。

(つづく)

いしまる あきこ 1935年東京都生まれ。国文学者、文芸評論家。東京大学文学部卒、同大学院人文科学研究所博士課程修了。東京経済大学名誉教授。著書に『面影びとは法然―式子内親王伝』（朝日新聞社）、『歴史に咲いた女たち―源氏の花 平家の花』（廣済堂出版）、『法然の手紙』（人文書院）、『お手紙からみる法然さま』、小説『月影の使者』（上・下）（浄土宗出版）ほか多数。

響流十方こいうるじうほう

阿弥陀仏あみだぶつと十声じしう称えてまどろまん

永き眠りになりもこそすれ

【法然上人】

南無阿弥陀仏と十遍称えてから眠りにつこう。

このまま息絶えて永遠の眠りについてしまうかもしれないのですから。

時は今

朝七時、妻が寢室のテレビをつける。夫が布団のなかで目を醒ましなが
 ニュースを見る。九十歳を目の前にした老夫婦にとって、それがいつもと変
 わらぬ朝の風景だった。その日はゴミの日だった。妻が声を掛ける。「ちよつと、
 ゴミ出し行ってくるね」。夫は「はいよ」と返事をする。これも、いつもと変
 わらぬ風景だった。朝から秋らしい好天であった。

某士業事務所を営んでいた夫は、その前々日の朝、事務所を継いだ息子や地
 域の某士業会の仲間と一泊のバス旅行に出発した。目的地は同じ長野県内の某
 温泉地。海外旅行が趣味の夫であったが、仲間との年一回の懇親旅行はまた格
 別で、毎年、宴会の「締め」を頼まれるこの旅行がこの上のない楽しみであつ
 た。高齢者だけに出発前日には医者に行き「旅行OK」のお墨付きさえもらつ
 ていた。

気分が悪くなったのは宴会の途中であつた。「締め」もやらずに宴会場から
 部屋に戻った。息子が心配して、明日の朝、うちから迎えを呼ぶから一緒に帰
 ろうと言った。父は「いいから、大丈夫だ」と言った。翌朝、温泉に入ってみた。
 元気が出た。宴会の食事もうくに食べられなかったから、お腹もすいていた。
 朝食のおかわりもした。息子はまだ心配していたが、仲間も本人も安堵した。

夕刻、旅行を終え自宅に戻った。心配する息子は父に「まだ診てもらえるから医者に行こうよ」と言った。父は「明日でいい」と言った。息子は「じゃあ、必ずだよ。連れて行くからね」と言って自分の家族のもとに帰っていった。大事に至るとは、息子も含め誰も思っていなかった。

テレビの音がするなか、ゴミ出しから帰った妻が夫に「ただいま」と玄関から家のなかに声を掛けた。返事がなかった。寝室に行つて、もう一度声を掛けたが、また返事がなかった。

さつきまでいつもの朝であつた。いつもの二人であつた。妻がゴミ出しから帰るまでのほんの二、三分であつた。その間に夫は逝つた。部屋のテレビは、アナウンサーがさつきのニュースの続きを読むを讀んでいた。外は好天のままだった。いつもと変わらぬ日常がそこにあつた。その日常のなかに、当たり前のような顔をした死が訪れていた。

昇る太陽とともに朝が来て、沈む太陽ともに来る。それが当たり前のことであるのと同じように、人は生まれて死んでいく。ただそのことを、誰もが自分のことだとは思えないようにして生きている。家族はもちろん、当の本人でさえ思いもよらない朝となつたが、当たり前前（あたりまえ）の顔をして訪れた

だけのことなのである。

健康な人には健康な人なりの、病氣の人には病氣の人なりの、老いた人には老いた人なりの、若い人には若い人なりの、人には人それぞれの日常がある。そしてそれぞれの日常のなかにこそ、その人の死がある。そのことを法然上人は「十声称えてまどろまん」と詠むのである。

今日のこの一日が人生最後の一日であってもいいように、今のこの一瞬が人生最後の一瞬でもいいように、毎晩、お念仏を称えてから眠りにつきましょう。そうやってお念仏を私たちの日常にするならば、私たちの日常に自分自身の念仏往生が組み込まれていくのです。阿弥陀さまの御心と繰り返し出会うことができるのです。どうか、そういう人生を送りましょう、と。

来年四月末で平成の代が終わります。平成八年六月号が連載開始のこのリーエッセイ、初回こそ長谷川岱潤師が筆を執りましたが、その後は小村、林田、袖山の三人で担当させていただきました。なんと二十三年です。その間、文庫版も出していただきました。今や後進にあとを託す時です。長らくのご愛読ありがとうございます。

(袖山榮輝)

第二十六回

江戸の川 を歩く

江戸ウオーカー

森清鑑

深川

東洋のヴェニス

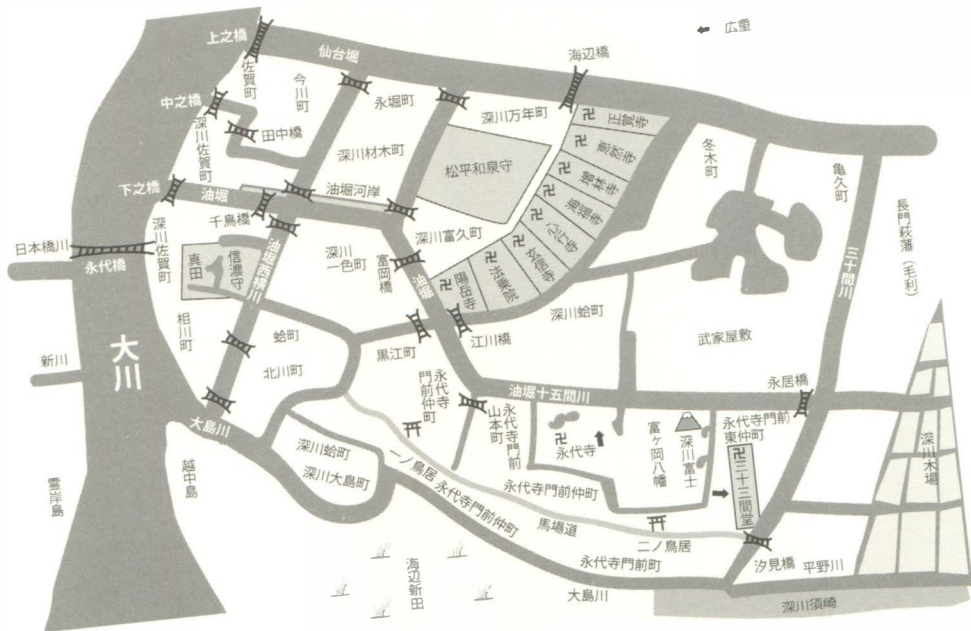
仙台堀から江戸湾までの深川は正に東洋のヴェニス。網の目のように広がる堀の狭間に町が浮かんでいる、といった景観である。まさしく江戸湾の浅瀬を埋めて、水の都を醸成した、の感がある。ここに人々が密集し、活気に溢れ、町民、武士、神社仏閣が混在する、美しい水の都。日本橋に代わる材木蔵、「深川木場」の創出。これを軸に、経済状況を現出。そこには、新たな江戸文化が創出されることになる。当初は、漁師が住み、江戸湾の魚介類などを収獲した典型的な深川漁師町八か村で始まる。それが、明暦の大火や一六四一年の桶町火事（日本橋桶町から出火。家屋一千九百戸以上焼失、死者数百人）これを機に府内三十五町に散在していた材木置き場を永代島に移転命令）

で、江戸の町は焼き尽くされ、大川を挟む安全地帯へ、人口移動。経済面では江戸の復興に欠かせぬ建設資材、なかならず材木の収集拠点、流通販売が发展。貯木場は、日本橋から木場へ移転。紀伊国屋文左衛門の活躍。材木運搬に欠かせぬ運河が網の目のように張り巡らされた理由もここにある。そして次第に様々な物資の「蔵の町」として发展。文化面では、広大な永代寺門前の門前仲町に芸妓が集まり、三味線の音が鳴り響き、通称、深川八幡宮（江戸期、富ヶ岡八幡宮）の祭りは江戸三大祭りに発展する。

油堀

仙台堀の大川口おおかわぐちに架かる「上之橋」。この下に「中之橋」。さらにその下に「下之橋」が架かる。この下之橋から東へ、広大な新材木集積地、「深川木場」に直結している運河が油堀である。永代寺から木場までは通称「十五間堀（二十七メートル）」とも呼ばれる（現在、首都高速9号深川線）。そして大

水の都 深川永代



川、中之橋から入った流路は、町を鍵型に割って、仙台堀から南へ江戸湾まで流れる油堀西横川に出る。大川側を何故、油堀というのか。油問屋が集まっていたからである。

深川佐賀町

江戸東京資料館には、この町の模型が展示されている。主として大川沿いに集中しているこの町は、早期の深川八幡師町の一つ、藤左衛門町、次兵衛町が元禄八年深川佐賀町となった。肥前の国、佐賀湊に地形が似ているというところから付いた地名である。大川沿いに永代橋まで続くこの町は油問屋、干鰯問屋^{ほしか}、米問屋が集中し、蔵の町でもある。長屋には、木戸番が置かれ、夜十時には木戸が閉められる。自身番屋、高い火の見櫓が立ち、小舟が至る所に岸付けされており、三井越後屋の大きな貨蔵もある。

下之橋を潜って油堀に入ると佐賀町を過ぎ、左、堀川町右、加賀町となり、左岸には、油堀河岸^{かし}が

続く。右、一色河岸から右に折れ曲がると富岡橋。潜ると左一帯、仙台堀まで九寺が連なり、永代橋事故の死者を弔った海福寺もある。堀沿いに陽岳寺と八十八カ所札所、閻魔様で知られる法乗院の屋根が見える。陽岳寺は、代々、船手頭として江戸湾を守った二代目向井将監忠勝が勧請した寺。無論、彼の墓もある。

これが過ぎると、仙台堀からの入堀と交錯し、流れは左に折れ、十五間川となり、右手に広大な永代寺、深川八幡（富岡八幡）の境内が続く。つまり、油堀は広大な永代寺、富岡八幡の北側縁を舐めるように走っていたのである。

永代寺

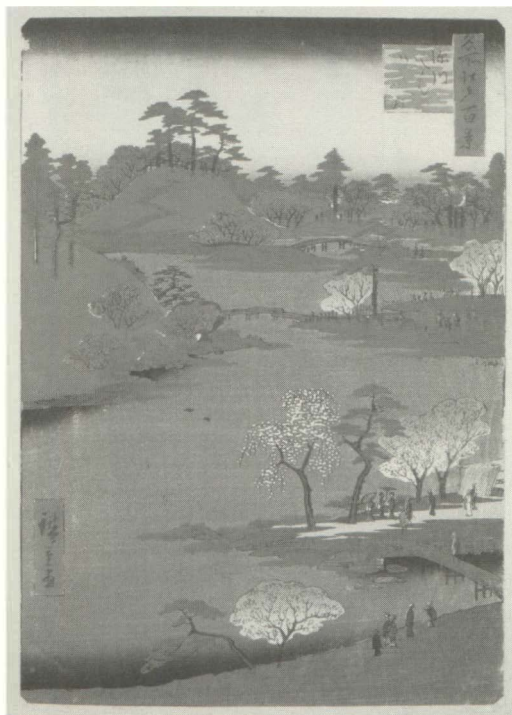
当初、この辺りは、深川永代島と呼ばれていた。孤立した島であった。埋立が進み、ここに深川八幡の別当寺として永代寺（高野山真言宗）が建てられる。幕府の加護もあり、後に、大伽藍を擁し栄えた。多くの人が行き交うため、境内に江戸六

永代橋

架橋は元禄十一年（一六九八）。將軍綱吉五十歳

地蔵が建てられ、時の鐘もあった。それが、明治の廃仏毀釈で廃寺となり、跡地は深川公園、深川不動となっている。永代寺の門前町として栄えたのが門前仲町である。

広重「深川八幡山開き」 広大な永代寺の庭園



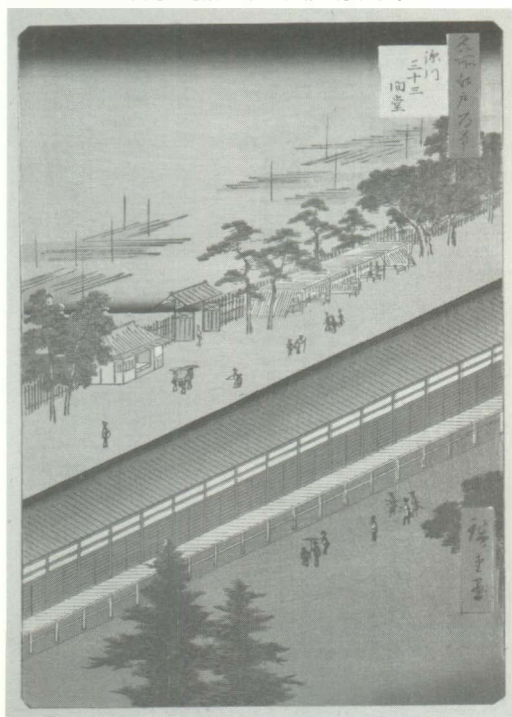
を祝う橋。長さ百二十間余。上野寛永寺建造の余材も使ったともいわれる。位置は現在の永代橋より北側、日本橋川と直結している。元は「深川の大渡し」^{わた}があつたところで、深川の発展につれ、交通の要衝として建造される。名称は永代島、永代寺から。吉良上野介の首を掲げた大石内蔵助一行が加賀町で休憩を取った後、この橋を渡り、泉岳寺に赴いたことで、話題となる。文化四年（一

八〇七）、深川八幡祭礼に詰めかけた群衆の重みで東側数間ほどが崩落。死者千四百名という途方もない大惨事を招いた。大田南畝「永代えいたいと架けたる橋は落ちにけり、今日は祭礼、明日は葬礼」。

深川八幡（富岡八幡）

江戸最大の八幡様で別当の永代寺と当然地続き

広重「三十三間堂」：遠景に深川木場の材木が浮かぶ



である。江戸っ子は深川と言えばここを想起する。深川八幡の祭礼は江戸三大祭りとして有名。巨大な御輿が練り歩き、清めの水を御輿にかける。通称、水掛祭り。創建は一六二七年（寛永四年）。菅原道真の末裔といわれる長盛法印が永代島に創建。徳川將軍家の保護を受け、大伽藍に。江戸勸進相撲発祥の地で今日も多くの子供が記念碑を残す。深川八幡、永代寺領をぐるりと囲む堀が油堀十五間川と繋

がつている。川沿いに八幡の深川富士が聳え、この囲み堀の次の一郭が永代寺門前東仲町。そこに三十三間堂があった。京都三十三間堂を模した建物で、当初、浅草にあったが火災で焼失。元禄十一年に当地に再建。京都と全く同じ通し矢で有名。油堀十五間川はここを過ぎると南北に流れる三十間川にぶつかり、これを越すと広大な深川木場に直結する。

永代寺門前町

深川八幡（富ヶ岡八幡宮、今、富岡八幡）の細長い参詣道を出ると、馬場通（永代通り）。そこに大きな鳥居が立っている。これが二の鳥居。西にちょっと歩くと堂々たる一の鳥居が立っている。江戸一番の大御輿の通り道。沿道に茶店が密集し、大賑わいになる。永代寺門前仲町、永代寺門前山本町、永代寺門前町、深川黒江町（門前仲町、富岡町）に人口が密集し、至る所に岡場所ができる。「岡」とは傍系の意味。つまり格式高い、「吉原」

傍系の遊郭ということ。日を追うごとに江戸最大の岡場所に発展する。そのとき遊女数四百七十二名。

そして岡場所とは異なる花街ができる。材木問屋が商談する場合、かならず芸妓が入る。これが辰巳芸者。辰巳とは江戸の東南にある花街の意味。日本橋の人気芸者が深川に居を移したことが発端となり、天保の頃には二百六十一名を数える。辰巳芸者は、芸は売っても色は売らない心意気を持ち、気っ風が良く、情に厚い。芸名も「音吉」、「薦吉」、「豆奴」など男名前を名のつた。これが人情に厚い粋な職人達に大受けする。

この辺り、芝居、時代小説に欠かせぬ舞台で、柴田錬三郎の『御家人斬九郎』の相棒、「おつた」も辰巳芸者で事件の解決に一役買う。深川は、斬九郎の活躍舞台でもある。歌舞伎狂言の「名月八幡祭り」の主役は、辰巳芸者「美代吉」。池波正太郎『鬼平犯科帳』の長谷川平蔵もしばしば八幡様を訪れる。

大島川

最南端の巨大堀が大島川で幅二十間(三十六メートル)。今日も堂々たる流れを見せている。最早、江戸湾(大川河口)と言って良い深川越中島と深川相川町、中島町の間を割って入り、東へと流れ、永代寺門前町の直ぐ下を通り、三十三間堂のところで北から流れてくる三十間川と合流する。三十間川の汐見橋を左に見て、材木置き場を、さらに直進すると平野川となり、広大な深川木場の底辺沿いに流れる。言うまでもなく、大島川も材木運搬の重要な河川である。大島川の南は、海辺新田に続いて平野川の底辺に深川州崎十萬坪があり、その先は江戸湾、深川沖の茫洋たる海景色となる。



歌麿の「深川の雪」辰巳芸者

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第九十三回

第三部

充実と稔りの白秋へ

洲崎大火と米騒動



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校（現芝中・高校）、同本校（現・大正大）へ進学を許され、明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として仏教再生の興望を担い、印度学の拠点ドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍らキリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、バーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表、仏教に造詣が深いオーストリア人ハンガリー帝国元駐日代理公使クーデンホーフ伯と出会う。また、ヨーロッパ初の比丘ニャーナティロカルの存在を知らされ強い興味を覚える。一方盟友・荻原雲来が博士号を取得して帰国、残された海旭は母トナと導きの師・端山海定逝去の悲報に耐えながら博士号を取得するも宗門から給付金を打ち切られる。東大教授・姉崎正治の仲介で富豪カーンに援助を求めるが断られ万策尽きたところへドイツ駐節日本大使の珍田捨己から援助の手が差し伸べられ、海旭は悩んだ末に相思のドイツ女性の勧めを受け入れ、シベリア鉄道で帰国の途へ。途次奉天で新仏教運動で知り合った満蒙の外交官・北条大洋と再会。大アジア主義に共感。十一年ぶりに祖国の土を踏むといきなり「大逆事件」に遭遇。今後の身の処し方を思案するなか盟友の高島米峰の依頼で「新仏教」に創作童話「釣籠籠」を発表。ドイツ留学時代から温めていた細民支援の「浄土宗労働共済会」を立ち上げる。

高島米峰の来訪

浄土宗労働共済会を立ち上げた渡辺海旭のもとを、畏友の東大教授・姉崎正治が訪ねてきてからさらに数日して、今度は、新仏教運動の設立仲間の高島米峰がやってきた。同じ新仏教徒同志会の杉村楚人冠ほどではないが、高島も、仏教徒が社会事業をやることにについては消極的だった。だが、現場をみるなり言った。

「いやいや感服した。キリスト教の専売をここまで凌駕してやっているとは。残念ながら、明治以後の社会事業は殆んどキリスト教徒によって独占されてきたが、おぬしが帰朝して以来、今日ではキリスト教徒に比べて遜色ないどころか、むしろ一歩先んじているぐらいだ。それもこれも、おぬしの力強い指導と、おぬしがドイツで着想を得たという、セツルなんとかという……」

「セ、セツルメント、だ」と海旭は補足した。

「そうそう、そのセツルメントだ。それにそもそも社会事業という言葉はおぬしがつくったようなものだ。それまでは慈善事業だの、救済事業だの、救貧事業だのといっていたが、このことをとつても、この方面に貧弱だったわが仏教界へのおぬしの貢献や第一等だ」

「い、いや」と海旭は首を振った。「お、お褒めにあずかるのは光栄だが、まだまだだ。診療所ではなく本格的な病院もつくりたい、職業斡旋所も充実させたい」

「ところで、姉崎兄からきいたが、おぬしはずいぶんと社会主義者や労働運動に手厳しいらしい」と高島は話題を切り換えた。どうやら、これが訪問の真意らしいと海旭は気づいた。高島は相変わらず堺利彦ら社会主義者と付き合っているようだった。「おぬしの考えを改めて訊きたい。どうなんだ」

「ぼ、僕は、ろ、労働問題解決の要諦は、階級闘争主義から報恩主義への転換にあると考えている。階級闘争主義のどこがいけないか。

その第一は、もし資本と労働との対戦が多く
の説の如く、必ず一方の勝利に終ることを予定しての主義だとすると、これは即ち征服主義だ。この労働専制思想の危うさは論ずるまでもない。もうひとつは、闘争を単なる手段と見ていることだ。最後の平和のためには非常手段もやむなしとするのは、目的のためには手段を選ばぬイエズス会主義だ。過去の歴史におけるイエズス会の道士たちが犯した罪悪に戦慄する時、その手法を労働運動に適用するのを容認するのは人類の不幸だ」

「だったら」と高島は訊いた。「社会主義者による労働運動はだめなのか」

「そ、そんなことはない、階級闘争主義から脱却すればよい」

「脱却してどこへいけばよいのか」と尋ねる高島に、

「だ、大乘仏教精神に基づく報恩主義だ」と海旭は受けて、次の五条を挙げた。

一、文化的に各要素相互の共済と共助と共勵

との協同的意識。

二、経済的に生産の増殖を考え各階級の穩健な協同努力。

三、社会的に他人の人格を認めその正当の權利を容認し尊重する。

四、国民の協同精神。

五、人道上相互の理解を感謝若しくは物質の上に積極的に表出する。

高島はただした。「なるほど、ではもう一点問おう。報恩主義に立つとして、労働者と資本家の関係はどうなる」

海旭はためらうことなく答えた。

「ま、まず資本家の労働者に対する報恩の実行から始めたい。やはり歩み寄るべきは資本家だろう」大きく頷く高島に海旭は頷き返して、言った。「そもそも資本家と労働者とは、立場が天と地ほどもちがう。それを無視した治安警察法第十七条は悪法酷律だ。みだりに罷業すると直ぐ牢獄にぶち込まれて、不幸な目に遭う。佐倉宗五郎か大塩平八郎のよう

な覚悟がなければ、立ち上ることができない。小笠原流のごとき礼儀作法によつて労働者が行動しなければならないとは甚しい矛盾ではないか。団結罷業権、団結権のない労働者が、僱主に向つて、いかなる条件を提出しても、僱主にはなんらの効果も与えず、雇い主はびくともせず、何もしないのは当然だ」

「佐倉宗五郎に大塩平八郎、はたまた小笠原流をたとえに引くとは、時代がかつていて、いかにもおぬしらしいが」と言うが高島は、笑いを押し殺してただした。「おぬしは将来日本において労働組合は容認されるべきだと」

「も、もちろんだとも」と海旭は答えた。「労働組合を認められて、治安警察法第十七条は廃止されるべきだ。そしてこそはじめて、日本は法制上社会上世界各国と同一となれるのだ」

「そうか」高島は安堵を口調ににじませて言った。「要するに、おぬしは社会主義者や

労働組合運動を敵にまわしているわけではないのだな。これで俺も大安心だ。堺たちをばげましてやろう」

「そのためには連中も階級闘争主義を棄てて、報恩主義に宗旨がえせよ。そう伝えてくれ」と海旭は返して高島を送り出した。

洲崎遊郭の大火に救援活動

海旭のなかでは、ドイツで学んだ社会事業は、日本では「画に描いたモチ」とまでは言いすぎにしても、ドイツでは通用しても日本では通用しそうもない、そんな思いがますます強くなっていた。創作童話で海旭のモデルと思われる老爺が釣り上げたものの放った金龍とは、ドイツの地で学んだ社会事業だったのかもしれない。

いっぽうで、米峰にたいして社会主義の限界を語った手前、その根拠を身をもって示してみせなければならぬ。平たく言えば、百の理論よりも一つの実践である。それも場所

はドイツではなく近代化途上の日本である。日本の実情にあうように創意工夫した実践でなければ、受け入れてはもらえない。言うは易く行なうは難いそれに海旭が挑戦せんとしたのが、まさに浄土宗労働共済会であった。そして、その挑戦がさつそく試される事件が、労働共済会設立の翌年に、ほぼ時期を同じくして起きたのだった。

「洲崎の大火」と二年つづきの凶作による「米価高騰」である。

まずは「洲崎の大火」から語るとしよう。

洲崎とは、元禄年間（一六八八―一七〇四年）に江戸湾を埋め立てた造成地で、古くは安藤広重の「江戸名所百景」にも描かれた景勝地だったが、明治二十一年（一八八八）、東京帝国大学が本郷に設立されることになり、隣接する根津遊郭が風紀上よろしくないということで洲崎へと移転、以来、洲崎は「帝都」における吉原とならぶ一大歓楽地として殷賑をきわめ、その近隣は遊郭関連の人々の

住居が密集していた。ちなみに現在の江東区東陽一丁目付近にあたる。

明治四十五年（一九一二）三月二十一日、その洲崎遊郭の妓楼の一つから出火、折からの南風にあおられ、火の手は西平井町から東平井町一帯、さらには豊住町へと燃え広がって同地にあつた宮内省御料材置場も焼失した。全焼家屋は千四百四十九戸、焼損面積は一万七千九百七十五坪（五万九千三百十八平方メートル）。四か月後に明治天皇が崩御、年内に元号が「大正」と代わったため、明治期最後の大火といわれるようになった。

さいわい、海旭が住職につく西光寺と監督官をつとめる労働共済会の施設には火の手が及ばなかった。さっそく海旭は陣頭指揮をとると、被災者の援護にあたつたのはいうまでもない。

翌々日の「読売新聞」（明治四十五年三月二十三日付け）は、紙面の半分以上を「大火的翌日の罹災者救護情況」にあて、そのなか

で「行届いた救護」の見出しとともに、海旭の活躍の一部を次のように報じている。

「深川区西平野町浄土宗労働共済会では百五十名罹災者を無料で宿泊させ食事入浴等総てを弁じやる予定にて今既に二十九名収容して居る」

これが評価されて、三年後の大正三年、浄土宗労働共済会には内務省から奨励金五百円也が下附されている。

米価高騰でダブルパンチ

もうひとつ、海旭の挑戦が試されたのは、この年に生じた深刻な米価高騰である。東日本一帯は二年続きの天候不良による凶作で、これに地主や商人たちの売り惜しみや買い占めが拍車をかけて米価が高騰。当時の肉體労働者は一日に一升（一・ハリットル）もの米を消費したため家計を圧迫して大きな社会間

題となった。(なお、富山県内では、主婦たちが欠食児の増加に救援米を要求するなどの運動があり、六年後の「米騒動」の萌芽がここにあったとされる)。

とりわけ洲崎の大火で甚大な被害をこうむった海旭の地元にとってはダブルパンチで、状況はきわめて深刻であった。

「読売新聞」(明治四十五年四月二十六日付)は、「生活難の声」なる連載ルポのなかで「洲崎大火の跡の惨状」を次のように活写している。

「例の大火となったので暴悪なる家主は家賃を引上げた、焼出れた面々は家なしには居られずドシドシ高い家を借りて入り込んだ者が扇橋署の調査によれば千余人の多きに及んで居る、高いと知りつゝ、無一物で借り込んだ連中は差詰収入の途もなく殆ど座食の姿で居る、一方家賃は嵩む米価は暴騰す、衣食住三方面の包囲攻撃に逢ひ減食者は続々殖えるば

かりである」

この只ならぬ状態の渦中であつて、海旭は労働共済会で困窮者を受け入れるだけの「待ち」から、「攻め」に転じた。主筆をつとめる『浄土教報』で、「活施設餓鬼を修すべし」との見出しを掲げて、こう獅子吼したのである。

「(前略)米価の暴騰、細民の飢餓に丁りて、東京富豪の甚しく奮はざるは実に吾国の恥辱なり、済生会の為に幾万幾千幾百の巨額を寄付したる紳商富豪は今や生民菜色ある時にあたりて毫も計画する所あるを聞かず、名門華胃、亦些も倉廩を開きて賑恤の外挙あるを見るなし是実に吾国文化の為の一大恥辱にあらずや。

都門の華胃紳商にして一たび起たんか、都下幾万の細民を賑すに於て其効果必らず見るべきものあらむ。

明治四十五年三月二十三日付

●大火的翌日

▲被害者の惨状

▲行届いた救護

▲救護車活動

▲消防隊日本

▲大火の惨状




洲崎大火における渡辺海旭の浄土宗労働共済会の救援活動を伝える「読売新聞」
(明治四十五年三月二十三日付)

教家は此際一大連合を造り、仁愛慈悲の大道の為に先づ紳縮富豪を動かすを要す、火の如き弁論鉄の如き手腕、厭くまで之を用ゐて富豪をして一たび此死活の大問題に頭を廻さしめよ、願くば応急救済に対する十字軍のために朱門高き所玉楼深き裡幾多ペーター・ゼ（ザ）の誤植か？筆者）・ハーミットの熱弁を揮ひ去れ、是等々として爾が零細の貧囊を傾けて外米の販売に貢献するよりも先第一に切要にあらずや。

都門の寺院諸師此危機に丁り、少くとも盆供施餓鬼の供米一袋二袋を投ずるに吝なる勿れ、活施餓鬼を行ふ今日より怠るはなし」（明治四十五年七月）

なお、「済生会」とは、前年の明治四十四年（一九一一年）、明治天皇の肝いりで「医療によって生活困窮者を救済する」ため、多くの「紳商富豪」の寄付によって設立された「恩賜財団」であり、現在もなお日本各地に多く

の医療施設が活動。名称は、生活困窮者を「済^い」、医療で地域の「生^{せい}」を守る、に由来する。にもかかわらず「紳商富豪は米価高騰による細民の困窮に無関心であるのはどうしたことか」という批判は、先に海旭が高島米峰に述べた、「歩み寄るべきは資本家だろう」という海旭の立位置の明快な表明であらう。

また、「外米の販売に貢献するよりも」云々は、台湾や中国からの緊急輸入米で急場を凌がんとする動きをうけた、海旭のライバルともいべきキリスト教系社会事業団体「救世軍」の救貧活動をさしていると思われる。さらにいうと、救世軍は先の「洲崎遊郭大火」を（これを奇貨に遊郭を廃止させる）娼娼運動に結び付けようとしていたが、「仏教の社会事業はそれとは一線を画すのだ」という海旭の強い意思と気概がうかがわれる。

さらに、ペーター・ゼ（ザッ）・ハーミットとは、「隠者ピエール Peter the Hermit」

のことで、中世、イスラム勢力が台頭するなかで、民衆十字軍を率いて聖地エルサレムをめざしたフランスの司祭である。米峰とのやりとりでの佐倉宗五郎と大塩平八郎につづいて、今度は仏教徒のくせにキリスト教の歴史的の人物を持ち出すとは、海旭の破天荒さにはおどろかされるが、実は「隠者ピエール」による民衆十字軍は、聖地をめざすも遠征途上でイスラム軍に蹴散らされ、多くは殺されるか奴隷となる無残な結果に終わった。

海旭としては、仏教徒たるもの、隠者ピエールのような「大言壮語」によって民衆を煽るのではなく、「不言実行」を求めたのであろう。すなわち、いまこそ大火と米価高騰という細民の危難に寄り添うまたとない機会であり、仏教徒による社会事業の真の実践とはなにかを内外に示さんとする不退転の覚悟の表われではなかったろうか。

（つづく）



短日や酒との時間長くなる

岱潤

先日小学校の教師からこんな話を聞いた。

授業で問題を出し、手を上げた子が二人いて、一人を指名し黒板に解答を書いてもらってその子が席に帰るとき、指さなかった子が足を出し、その子を転ばせ怪我をさせてしまった。教師は足を出した子を叱ってその場は終わりにしたが、後日足を出した子の親が学校に乗り込んで来た。転んだのは下を見ていなかった相手も悪い、うちの子だけ叱るのはおかしいと。校長は教師にとにかく親に謝れと、謝罪を強要したという。また新聞のコラムでも、女子社員が取引先で

セクハラに遭っていても、上司は見ないふりをしたということがあったと書かれていた。

先日同和研修の場で、最近差別する側の理由の一番は、リスク回避からだという話を聞いた。つまり、知らないけれど従っていた方が無難そうだからという理由だ。問題が大きくなるよりも、目の前の立場の弱い人に我慢してもらった方がいいということだ。

私たちは二一世紀になると、是非次の世紀は人権の世紀にしようと呼んだはずだ。しかしその時言葉すらなかった「ヘイトスピーチ」なることが始まり、昨今いじめが過去最大数を記録し、相模原事

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 藤谷勝正(日黒・祐成寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 大田博導(仙台・西方寺)
 加藤昌康(下北沢・森巖寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光圓寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 高口恭典(大阪・一心寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・恩鈍寺)
 成田昌憲(世田谷・大吉寺)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多義典(岡田・同国院)
 松溝泰彦(芝・寶松院)
 真野龍海(大本山・清浄華院)
 水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

八十四巻十一月号 頒価六百円

年金費六千円

昭和十年五月

白第三種郵便物認可

印刷

平成二十年十一月二十日

発行

平成三十年十一月一日

発行人

佐藤良純

編集人

加藤昌康

印刷所

株式会社 暁印刷

〒一〇五・〇〇一

東京都港区芝公園四丁目四明舎齋閣階

発行所

法然上人鑽仰会

電話

〇三・三五七八・六九四七

FAX

〇三・三五七八・七〇三六

振替

〇一・八〇・八・八二八七

件という障害者への虐殺もおきてしまった。世界の指導者は自国民ファーストが人気を集め、難民・移民の問題が深刻化している。今年ももう終わる。悲しい気持ちのまま。

(長)

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り)

※寺院名 () を入れる・入れない

※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。

※消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。

※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。

※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人顕仰会へ

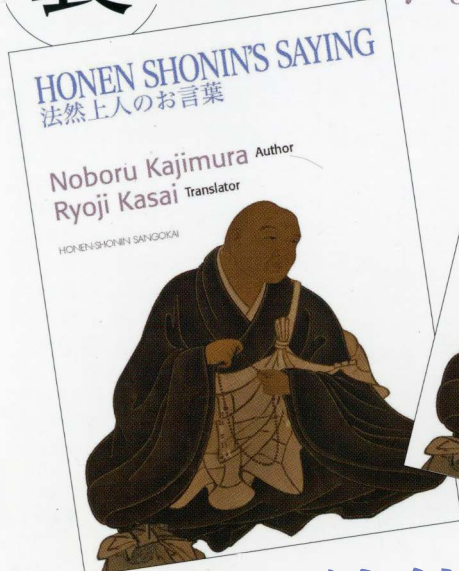
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または

郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

月刊浄土の連載が 単行本になりました。

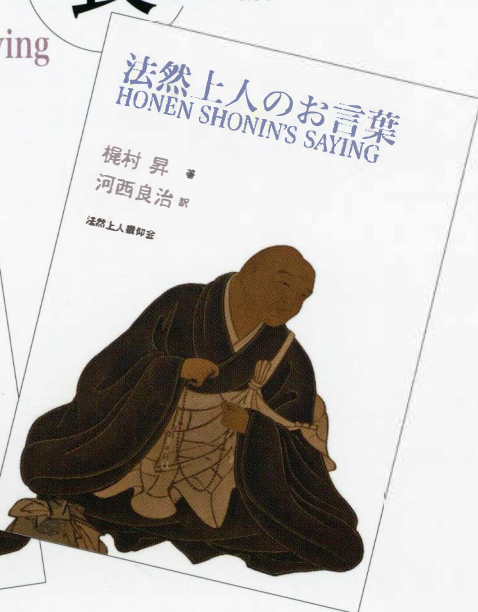
裏

左開きで英文の
Honen Shonin's Saying



表

右開きで和文の
ご法語



和英対応法然上人のお言葉

梶村 昇・著 河西良治・訳

ご法語と解説が和文と英文で一冊になりました。
外国の方のお土産にも最適です。A5判・124ページ 頒価 1,000円(税別)
12月中旬より電子書籍でもお読みいただけます。

法然上人鑽仰会だから
こそ作れる
オリジナル単行本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。